

第四部 周辺研究

第一章

童話集『注文の多い料理店』発行をめぐって

発行者・近森善一の談をもとに

『新校本宮沢賢治全集』第一〇巻の月報五（平7）ですでに予告的に書いたことだが、高知県に転居した私は、たまたま、童話集『注文の多い料理店』の発行者近森善一の高知県立農学校（現、県立高知農業高等学校）時代の教え子である小松亮氏の知遇を得、氏が記録した近森からの聞き書き（昭和二六年）や、初版本『注文の多い料理店』を拝見することができた。小松氏は六九歳（平成八年当時）、近森善一の生家と同じ香美郡野市町兎田にお住まいである。またその後、先の月報が機縁となり、土佐賢治の会の長谷部伸作氏より、氏が録音保管していた近森のインタビューテープ（昭和四一年）の借用を許され、そのテープ起こし（活字化）をまかされることになった。それらの未発表資料は、童話集『注文の多い料理店』の発刊の経緯を中心に、従来の評伝を補う価値ある幾つかの事実を含んでいるように思われる。

ここに、小松、長谷部両氏の了解のもと、それら新資料の紹介をするとともに、併せて、賢治年譜にかかわる諸問題を提起し、務めを果たしたいと考える。

一 賢治年譜の問題点

童話集『注文の多い料理店』の発刊経緯にしばって考えた場合、年譜を作成する上でのその中心的な元資料は、及川四郎が残した証言（及川の手になる文章や及川からの聞き書き）であった。周知のように、及川四郎は、近森善一と共同で「東北農業薬剤研究所」を興し、病害虫駆除の薬剤を製造、販売、さらに教科書類の出版を手がけ、その延長上に童話集『注文の多い料理店』を誕生させた人物である。共同事業者の近森は、童話集の出版の話がまとまって間もなく父親の選挙の手伝いのため郷里の高知に帰ったとされ、その後は、及川が、金銭的な算段をはじめ童話集に関わるほぼ一切の仕事を切り盛りしたと伝えられている。

しかし、もとより人の記憶というものは完全でなく、及川がその時々に残した資料を組み合わせただけで、童話集『注文の多い料理店』の発刊に関わる年譜的諸事項が出来るものではなかった。たとえば、「図書注文用振替用紙（東北農業薬剤研究所）」（後述）の存在一つとってみても、童話集『注文の多い料理店』の発刊までに、及川の記憶以上に複雑な過程のあったことが知られるのである。

堀尾青史は、長年、賢治年譜の作成に心血を注いで来た大先輩であるが、その苦労の一つは、矛盾し合う諸資料をいかに一筋の時間のなかにうまく収めるか、ということであったように思われる。私自身、ここしばらく近森善一の資料（聞き書きや録音テープ）の検証作業に携わってみて痛感したこともあるからだ。とはいえ、私は前出の月報において、堀尾年譜の抱える課題の一つを指摘した者であり、本稿では、あらためて冷静に堀尾の仕事を振り

返って見なければならぬだろう。

それは、堀尾が『年譜宮沢賢治伝』（図書新聞双書、昭41）、『校本宮沢賢治全集』第一四巻「宮沢賢治年譜」（筑摩書房、昭52、以下校本全集「宮沢賢治年譜」と略記）、『宮沢賢治年譜』（筑摩書房、平3）、『年譜宮沢賢治伝』（中央公論社、平3）と、正確を期して補訂し続けた『賢治年譜』の労作が、時として、年譜的整合性を保つ目的で、一部資料の恣意的な選択をせざるを得なかった過程を示しているように思われるからである。その結果、元資料がもともと抱えていたはずの矛盾や曖昧性は表面上解消され、年譜上の記載が事実そのものであるかのような錯覚をわれわれに与える弊を生じたと指摘できるだろう。年譜上の記載が限りなく事実に近いことの望まれることはいうまでもない。しかし、そのことと事実らしさとは厳密に区別されねばならないように思う。

おそらく、後に紹介する近森善一の記憶もまた、及川四郎の記憶と同様、記憶というものの性質上やむを得ない錯誤や曖昧さを多分に含んでいると予想される。それ故、ひとまずここでは、すでに公にされている元資料に基づき、それらが年譜に取り込まれる過程を検討することによって、年譜としての在り方の問題を考察しておきたい。

（一）近森善一が花巻農学校に賢治を訪ねた期日の揺れ

森莊已池に、及川四郎から聞いた話として賢治と近森に関する次のような聞き書きがある。

前にも言いましたが、二人とも一風かわった、特殊な人柄、言いかえると特別な個性をもった人たちでしたから、二人はたちまち親しくなつたらしい。近森はそのとき、例の『病虫害駆除予防便覧』と、『チカモリン』などの農業用薬剤の販売かたがた大正十三年の秋、花巻農学校に行つたのです。宮沢さんが、『春と修羅』を送つたら、ある女学校の先生が『春と修養』をありがとつと礼状をよこしたなどと話したあとで『童話なら、ナンボでもあるよ』と言って、どつさり書きためてあつたその原稿を、近森君に見せたものらしいのです。

（「『注文の多い料理店』その3」、「イーハトーヴォ」復刊第3号、昭31）

童話集『注文の多い料理店』発刊をめぐる及川四郎の記憶は次のようであつた。

花巻では賢治さんが県立農学校の教諭をしておられて、近森君がお訪ねしたときに「原稿があるが、童話集を君のところで出さないか」というお話があつた。近森君が盛岡に帰つて来て「どつしようか」と私に相談をかけましたが、おそらく近森君は賢治さんに「出しましょう」と言つてひきうけてきたにちがいありません。私は私で、即座に「よからう」と答えました。 略

賢治さんはこの年の春、すでに詩集『春と修羅』を公にされていました。この年大正十三年は、歴史的な関東大震災の翌年にあたります。初めての詩集を出されたあと、息もつがず、これも初めての童話集を発表されようという賢治さんの、はりつめた意欲に通じるあの時代の雰囲気の中に、私どもも生きていたと申せましよう。

（及川四郎「『注文の多い料理店』私記」『宮沢賢治全集』月報八、筑摩書房、昭43）

おそらく堀尾の労作『年譜宮沢賢治伝』（前出）は、これらの資料や、堀尾自身の及川からの聞き書きが踏まえられ、作成されたはずである。同書の《補述》「花巻農学校時代」の項によれば、次のように記されている。

さて『春と修羅』を出して意気上っていた賢治のところへ近森善一という人物があらわれた。近森は盛岡高農農科を一九一九年卒業したから賢治の後輩になる。この人物は同級生であつた及川四郎と共同で『病害虫駆除予防便覧』という五十銭のパンフレットと「チカモリン」なる農業用薬剤を製作し、その売り込みに農学校へやってきたのだ。

そのとき『春と修羅』のはなしが出、「童話ならなんぼでもあるよ」といって賢治がドサリと原稿を出してみせた。近森はそれを盛岡へもって帰って及川に見せ、

「だそじゃないか」

「うん、だそっ」

ということになったのである。勇気りんりんたる若者でないとできないはなしだ。

ところがまもなく近森善一は父親の選挙のことで郷里の高知県へ帰つたので、及川四郎が独力で出版することになった。そこで及川は協力者を求め、郷土出身で東京の出版社につとめていた吉田春蔵に製作見積りを依頼し、やがて一切東京で印刷することにした。経費は八百円かかるということである。また童話集の出版社としてその名にふさわしい社名がほしく、いろいろ考えて源光社はどうかとうとうと、賢治が光原社がどうかとうとうとそれにくまつた。東京の吉田春蔵の家を東京光原社としたので、本の奥付にはそうなっている。が、事實は及川四郎が吉田へ金を送って製作させたのである。

この記述から分かることは、堀尾は、近森が花巻農学校に賢治を訪ねた日を、及川の証言にしたがつて『春と修羅』の発刊（大正一三年四月二〇日）以降と考えていたことである。それが次の段階、すなわち、「『注文の多い料理店』刊行顛末記 付、『赤い鳥』広告の事 「四次元」¹⁹²号、昭42）では、「近森善一が花巻農学校をたずねて賢治にあつたのは、大正十三年（一九二四）二月か三月で、折から賢治は『春と修羅』の校正中であつた」と訂正され、近森の花巻農学校訪問日が『春と修羅』発刊の少し前に移されることになる。しかし、その根拠は本文中に示されておらず、及川からの直接の聞き書きかとは推測されるが、やや不可解な訂正であつたとの印象は拭えないだろう。

そして、校本全集「宮沢賢治年譜」（昭52）では、さらに次のように訂正されることになった（改訂版『宮沢賢治年譜』も同一）。

大正一二年一二月二〇日（木） イーハトヴ童話集刊行の意志をもち「序」を書く。恐らく近森善一の花巻農学校訪問（教科書、図書、農薬売込み）は一〇日以後この日までの間で、童話集出版の話が出た結果「序」が書かれたと推定する。

注《近森善一》 近森の花巻農学校訪問は正確ではないが、一二月一〇日以降二

〇日迄と推定した理由は近森著『蠅と蚊と蚤』の発行が大正一二年一二月一〇日とあ

るに依る。花巻農学校には校長畠山（明治四四年農学科卒業）賢治（大正七年農芸化学卒業）堀籠（大正一〇年農学科卒業）の先輩後輩がいるので、自著の献呈をかねて他の販売を依頼したであろう。このとき賢治から童話原稿のたくさんあることを聞かれ、たちまち出版の意思を持ったと思われる。

この再訂正のポイントは、童話集『注文の多い料理店』序に付された日付が印刷どおりの大正一二年一二月一〇日であるならば、童話集出版の話が出た近森の花巻農学校訪問は、必然的にそれ以前でなければならないということにある。したがって、賢治と近森との間に詩集『春と修羅』（大正一三年四月二〇日発行）の話があったとする及川の証言は記憶違いであり、また「折から賢治は『春と修羅』の校正中」であったはずもないことになる。堀尾がいつごろこの矛盾に気づいたかは定かではない。

校本全集「宮沢賢治年譜」（前出）での推定は、『年譜宮沢賢治伝』（中央公論社、平3）に引き継がれ、『年譜』の大正一二年一二月二〇日の項に、「イーハトーヴ童話集刊行の目的をもち、序文を書く。盛岡高農後輩の近森善一が学校へ自著『蚤と蚊と蠅』と『チカモリン』なる駆虫剤の売り込みに来、さまざまの話から出版の話になり、賢治は詩集は自費で、童話集は近森に託すことにし、出版社を光原社と名づけた」と記されている。

この中央公論社版『年譜宮沢賢治伝』で気にかかることがある。近森の花巻農学校訪問の際持参したものの一つが、『蠅と蚊と蚤』と記されていることについてである。元資料である及川の証言に基づけば、それは『病害虫駆除予防便覧』でなければならなかった。近森の花巻農学校訪問日を訂正せざるをえなかった都合上、堀尾が独自の判断で『蠅と蚊と蚤』と書き換えたものようだ。校本全集「宮沢賢治年譜」の注《近森善一》（前出）を見れば、堀尾の判断の経緯も納得のできないことではないが、近森の持参したものが『病害虫駆除予防便覧』でなく『蠅と蚊と蚤』であったことは、あくまで推定の域を脱しないもので、その記述の仕方には勇み足の感がある。

以上少しく、近森が花巻農学校を訪問したとされる期日の揺れをたどってみたが、その期日の推定も含め、童話集発刊に至る経緯に関して、未だ検証、考察の余地が少なからず残っているように思う。そのためには、賢治と近森との関係に言及しておかなければならない。

（二） 近森善一と賢治との間柄

童話集『注文の多い料理店』発行者としての近森善一の名は賢治研究者の間ではつとに知られた存在であった。しかし、近森に関する情報がすべて及川四郎經由であったことは看過されやすい事実で、近森に関してわれわれは間接的な情報だけを受け取っていたことを意味する。おそらく堀尾も、生前の近森から直接話を聞く機会を持たなかったに違いない。というのも、校本全集「宮沢賢治年譜」（前出改訂版も同一）での「近森善一」の記述を見ると、「盛岡中学に一年、長崎諫早農学校に三か月ほど勤め」とあり、この記述は、森莊已池による及川四郎からの聞き書き「『注文の多い料理店』その1」（「イーハトーヴ」復刊第1号、昭29）を元資料としていることが明らかだからである。近森の実際の盛岡中学、長崎諫早農学校の在職年月は、次節で略年譜を示すが、森の聞き書きとは少し異なっている。

堀尾の年譜から読み取れる近森と賢治との関係とはどのようなものであろうか。おそらく、

近森は賢治を《盛岡高等農林学校の一級先輩として顔を見知っていた程度》か、《一、二度言葉を交わした程度》であり、近森の花巻農学校訪問の理由も《商売上母校の先輩という伝を頼ってたまたま訪れた》との印象を受けるのではないか。ところが、森莊已池による及川四郎からの聞き書き「『注文の多い料理店』その2」（「イーハトーヴォ」復刊第2号、昭和30）によれば、近森と賢治との間柄は《親しい友人関係》とでもいったものであった。

近森・及川・宮沢・工藤藤一の四人が、盛岡市館坂の及川四郎氏宅に会合した席で、この『蠅と蚊と蚤』の出版はきめられたものであった。『蠅と蚊と蚤』という書名は、宮沢賢治の発案だ。それがきまるまで、四人は座敷にゴロゴロ寝ころびながら、考えあぐねた果てのことだった。

『蠅と蚊と蚤』の出版の話題が出たということからして、記述された場面は、近森の花巻農学校訪問以前でのことでなければならぬ。この森の聞き書きから読み取れるような賢治と近森との親しい間柄を記したものに、小倉豊文による角川文庫版『注文の多い料理店』（昭和31）の解説「新しい古典復刻の弁」がある。

賢治がこの『東北農業薬剤研究所』の『事業』にどの辺から関係したか私は知らない。しかし、盛岡市厨川館坂の『梁山泊』には、相当親しく出入りしていたに相違ない。

前にも触れたように、近森氏の『蠅と蚊と蚤』の書名も賢治の案だというが、おそらくこの『梁山泊』での縦談横議で、生まれたものだろう。

この小倉の記述が森の聞き書きに基づいたものであることは、引用文中の「近森氏の『蠅と蚊と蚤』の書名も賢治の案」の一文からも明らかである。

となれば、森の聞き書きを知らないはずのない堀尾が、なぜ近森と賢治とが《親しい友人関係》にあつた可能性を年譜に反映させなかったのか、という疑問が湧いてくる。森の聞き書きは資料としての信憑性に欠けるとの判断が働いていたのだろうか。森の聞き書きに幾つかの明白な錯誤の含まれていることは事実である（山口活版所主人山口徳治郎の高知行きの期日もその一つ）。そう考えてみると、堀尾の「『注文の多い料理店』刊行顛末記」「赤い鳥」広告の事」（前出）に記された、「これ（『蠅と蚊と蚤』のこと 注鈴木）は害虫の生態をのべたもので、書名は及川さんがつけたものである。（賢治がつけたというのはまちがい。）」の一文が、暗に、森の聞き書きである「『蠅と蚊と蚤』という書名は、宮沢賢治の発案だ」の訂正を意味していたことが思い返される。文中堀尾は訂正の根拠を示していないので、ここでその妥当性を判断することは避けるが、かりに『蠅と蚊と蚤』という書名を付けたのが賢治でなく及川であつたにしても、『蠅と蚊と蚤』の出版という及川と近森の共同事業に、賢治が多少なりとも関わっていた可能性は、依然として残るように思う。となれば、童話集『注文の多い料理店』の発刊の契機は、近森が商売上花巻農学校に賢治を訪問したことにより偶然生じたのでなく、近森が花巻農学校を訪問する以前から賢治の内部に準備されつつあつた、との見方も成立しよう。

賢治と近森との関係を単なる盛岡高等農林学校の先輩、後輩として扱った堀尾の判断は、やや客観性に欠けた元資料の選択に基づくものと考えられる。

(三) 童話集『山男の四月』と童話集『注文の多い料理店』

童話集『注文の多い料理店』は、当初、童話集『山男の四月』として刊行が予定されていた。この意外な事実を発見したのは恩田逸夫であった。昭和三六年一〇月古書店で偶然目にした近森善一著『蠅と蚊と蚤』に、東北農業薬剤研究所の振替用紙の挟まっていることに気がついた。そしてその裏側を見ると、四月刊行予定として童話集『山男の四月』の宣伝が印刷されていたのである。内容見本のようなかたちで「かしはばやしの夜」の冒頭の幾行かも印刷されていた。周知のように四月(大正一三年)といえば、詩集『春と修羅』(関根書店より自費出版)の出版された月であり、したがって、賢治は或る時期、詩集と童話集との同時刊行を考えていたことになる。

しかし、この童話集『山男の四月』の存在は、当の及川四郎の記憶にはなかった。

私は『注文の多い料理店』を第一に推しましたが、私どもの出版物が農業テキストばかりでしたから『注文の多い料理店』では、飲食店を対象とした商業テキストと誤解されやしないかということで、賢治さんも近森君も、はじめのうちはややためらっていたが、結局、これでいこうということに三人の意見が一致しました。

(「『注文の多い料理店』私記」『宮沢賢治全集』月報八、昭42)

振替用紙の存在が動かせない以上、及川の記憶違いとせざるを得ない。この振り込み用紙の発見をつけて、当然堀尾の年譜は補訂されることになった。校本全集「宮沢賢治年譜」(改訂版も同一)では次のように記されている。後の近森の記憶とも関わってくるので、少し長くなるが引用する。

『注文の多い料理店』は当初『山男の四月』の書名で、定価一円、四月中に発行の予定であった。当時の本の定価で一円程度のものでいうと、有島武郎『一房の葡萄』(叢文閣、大正一一年六月、四六判二二三頁)が一円二〇銭、宇野浩二『赤い部屋』(天佑社、大正一二年二月、四六判二二三頁)が一円二〇銭、西条八十『現代童謡講話』(新潮社、大正一三年七月、四六判一九五頁)が一円二〇銭などがある。これらと比較して考えると、最初構想された『山男の四月』は四六判一五〇頁程度であったかと考えられるし、この形態でイーハートヴ童話集全二巻出版の大きな構想をもったことが「広告ちらし」(本全集一一巻三八九頁)にも示されている。しかし、実現したのは大幅に小さくして二二月発行、本文二三〇頁、定価一円六〇銭の『注文の多い料理店』一巻となった。序文を書いて一年経つ。この間の主な事情は刊行者側にある。刊行者側の異変は、最初から賢治と交渉のあった近森善一が、父親から急遽帰郷するよういわれ、高知へ発つてしまったことである。父の応援する候補者のための選挙の手伝いである。第一五回総選挙は五月一〇日が投票日だから、少くとも三月中に帰ったと思われる。で、協力者であった及川四郎が刊行を引きついだが、薬剤研究所(改名して光原社。杜陵出版部)には出版費用もなく、近森ももどらず、いろいろ見積りをしては出版形態の検討を迫られた。賢治としては四月に『春と修羅』と同時発刊の夢は消え、『山男の四月』の書名はふさわしくなくなり、『注文の多い料理店』として九篇の作品の配列も改めて度々勘

考された。

この年譜の記述のなかで特に検討しておきたいことは、童話集『山男の四月』から童話集『注文の多い料理店』への変更の際、内容の変更が伴っていたのかどうかという点である。堀尾の「最初構想された『山男の四月』は四六判一五〇頁程度」との推定は、「一円」という予定発売価格と当時の同程度の児童向け単行本との比較から割り出したものである。定価一円、一五〇頁の童話集『山男の四月』と、定価一円六〇銭、一三〇頁の『注文の多い料理店』という比べ方をするならば、読む者は当然、童話集『山男の四月』が童話集『注文の多い料理店』と変更される過程で、内容に収録作品数を含む大きな変更があったとの印象を受けるだろう。

しかし、「賢治としては四月に『春と修羅』と同時発刊の夢は消え、『山男の四月』の書名はふさわしくなくなり、『注文の多い料理店』として九篇の作品の配列も改めて度々勘考された」の記述の仕方から判断するに、当の堀尾は、童話集の内容変更ということまでは想定していなかったとも受け取れる。「度々勘考された」のはあくまで「作品の配列」であったのだ。では、堀尾は何のためにわざわざ有島武郎『一房の葡萄』や宇野浩二の『赤い部屋』の例を引いてきたのか。

また、「これらと比較して考えると、最初構想された『山男の四月』は四六判一五〇頁程度であったかと考えられるし、この形態でイーハトヴ童話集全一二巻出版の大きな構想をもったことが『広告ちらし』（本全集一一巻三八九頁）にも示されている」の記述に比重をかけて読むと、やはり、『山男の四月』と『注文の多い料理店』とは「形態」を異にしたものと受け取るしかないように見える。しかし、この記述は堀尾の明らかな誤謬である。「イーハトヴ童話集全一二巻出版」の構想が示された「広告ちらし」とは、校本全集で「広告ちらシ（大）」と呼ばれるもので、そこに読めるのは、「注文の多い料理店はその十二巻のセリーズの中の第一冊で先づその古風な童話としての形式と地方色とを以て類集したものであつて次の九編からなる」であつて、決して堀尾の記すような、「最初構想された『山男の四月』」が「四六判一五〇頁程度」の「形態」であつたことを傍証するものではない。

このように見てくるならば、童話集『山男の四月』から童話集『注文の多い料理店』への変更に関しては、現段階では、「図書注文振替用紙」に印刷された以上のことは何もいえないとするのが、年譜記載上の適切な判断というべきであろう。

さて、ここで広く問題を提起しておきたいことがある。それは、装丁、挿絵を担当した菊池武雄と童話集『山男の四月』との関係である。菊池の記憶によれば、装丁、挿絵を担当することになった経緯は次のようなものであつた。

夏近きある日のこと、当時花巻女学校で音楽の教師をしていた藤原君（略）から手紙があつて、「いま花巻で宮沢賢治という人と知り合つてゐる。農学出の詩人であるがその作るところの詩と童話は素晴らしく教わるどころ非常に多い。詩はこの春出版したばかりだが今度童話の本を出し度いといつてゐるので挿絵装幀に君を推薦したからやれ」というのである。略

折り返し今度は宮沢さんから小包で原稿がとどいた。手紙には「書名を（注文の多い料理店）として見たがどんなものか、別にいいのがあつたら考えてほしい。装幀は表紙

一枚めくつたら冷たい風がドウと吹いて来るようなのだといい」というような事が書いてあつて別に自分で描いた(月夜の電信柱)の下絵と出版広告の宣伝ポスターの構想など描いたのが入っていた。

(「『注文の多い料理店』出版の頃」草野心平編『宮沢賢治研究』筑摩書房、昭33) 菊池が藤原を通じ賢治から依頼の手紙を受け取ったのが「夏近きある日」(年譜では六月)であつたとすれば、四月発売予定であつた童話集『山男の四月』の時点では、菊池は童話集との関わりがなかったことになる。賢治は挿絵のない活字だけの童話集を出版するつもりだったのだろうか。しかしそれも考えにくいことだ。印刷をまかされた東京光原社に童話原稿が渡ったのはいつ頃なのか、菊池に記憶違いの可能性はないのか、調べてみたいことはいろいろある。いま手元の資料から推定できることだけ触れておくとするれば、東京光原社の活動状況に関して大正一三年七月一〇日の日付が印刷された東北農業薬剂研究所出版部の「暑中御伺」葉書(宮沢賢治会イーハト ブセンター「会報」第5号、平4)に「東京支店光原社」の名が確認できるので、この葉書が印刷所に回されたと推定される六月下旬頃には、確かに「東京支店光原社」が機能していたことが分かる。光原社は賢治の命名とされるから、もし新たに「東京支店光原社」に関する四月前後の資料が発見されたなら、童話集出版準備の進捗状況も推定が可能になるだろう。今後に期待したい。

なお、続橋達雄が『宮沢賢治研究叢書5「注文の多い料理店」研究』(学芸書林、昭50)の解説でふれた次のことは、おそらく私が投げかけた疑問と重なることと思われるので引用しておく。

この広告文(東北農業薬剂研究所出版部の振替用紙のこと 注鈴木)は及川氏の回想、とくに『童話集』の表題決定の部分や、堀尾氏の紹介している菊池武雄氏の回想と微妙にかかわっていることを一言しておく。

二 近森善一(ちかもり・よしかつ) 略年譜

次に記す近森善一の略年譜は、近森のご長男近森善宏氏のご承諾のもと、県立高知農業高校に保管されていた自筆履歴書を基本に、適宜選択加筆の上作成したものである。

一八九七(明治30) 年 0歳

八月二十五日 高知県香美郡富家村(現在、香美郡野市町)に生まれる。

一九〇九(明治42) 年 12歳

四月八日 高知県立中学海南学校に入学。

明治43年(13歳)の可能性あり。

一九一五(大正4) 年 18歳

三月 高知県立中学海南学校を卒業。

一九一六(大正5) 年 19歳

四月一〇日 盛岡高等農林学校農学科第一部に入学。

一九一九(大正8) 年 22歳

三月一九日 盛岡高等農林学校農学科第一部を卒業。

- 四月十五日 引き続き、昆虫学研究生となる。
- 一九二〇（大正9）年 23歳
- 九月一四日 岩手県立盛岡中学校教師、嘱託となる。
- 一九二二（大正11）年 25歳
- 一月三〇日 昆虫学研究生を終了。
- 一月三一日 岩手県立盛岡中学校教諭となる。
- 四月三日 長崎県立諫早農業高等学校（現、長崎県立諫早農業高等学校）に転任。
- 一月一〇日 長崎県立農学校を退職。
- 一九二三（大正12）年 26歳
- 一月一〇日 盛岡高等農林学校助手となる。
- 七月三一日 盛岡高等農林学校助手をやめる。
- 一九二五（大正14）年 28歳
- 二月一日 高知県香美郡富家村村長となる。
- 八月 結婚。
- 一九二七（昭和2）年 30歳
- 四月九日 高知県香美郡富家村村長を辞職。
- 四月二三日 高知県立農学校教諭（現、高知県立高知農業高等学校）となる。高知県立農業教員養成所教諭を兼任。
- 一九四四（昭和19）年 47歳
- 七月二八日 高知県立農学校を退職。
- その後短期間だが、県立農事試験場に勤務（時期不詳）。
- 一九五一（昭和27）年 54歳
- 秋 （小松亮氏の聞き書き）
- 一九五二（昭和27）年 55歳
- 六月二二日 高知県香美郡富家村村長となる。
- 一九五三（昭和28）年 56歳
- 六月六日 高知県香美郡富家村村長を辞職。
- 一九六六（昭和41）年 69歳
- 九月一五日 （長谷部伸作氏インタビュー）
- 一九七三（昭和48）年 76歳
- 一月一四日 死去。

三 小松亮氏の聞き書き

次に紹介する小松亮氏の聞き書きは、「宮沢賢治聞書」と題され、昭和五八年一二月七日、氏がお住まいの高知県香美郡野市町の有線放送番組「有線の広場」で放送されたものである。その原稿は放送の後、「有線の広場」第三集（昭59）に収録、活字化されている。小松氏のお話によると、近森善一宅に訪ねたのが昭和二六年の秋。氏の賢治に関する予備知識は、作品は別として古谷綱武の賢治論から得たもの程度であったとのこと。また、聞き書きの内容の主な点は、すでにその当時記録して置いたもので、有線放送のため思い返したものでない

とのことである。小松氏は翌一七年、農業研修生としてアメリカに半年ほど渡られたが、研修生選抜試験の作文に宮沢賢治のことを書かれたそうである。

宮沢賢治聞書

兎田 小松 亮

童話「風の又三郎」や「雨ニモマケズ」の詩で名高い宮沢賢治の名前を知らない人はないと思いますが、その賢治と、とても深いつきあいがあり、或る面では賢治の援助者でもあった人が私達の近くに居たということを知っている人は少ないのではないのでしょうか。今日は私がその人、近森善一先生からお聞きした賢治のあれこれを御紹介したいと思います。ですから題名は宮沢賢治聞書としましたが、正確には又聞とすべきかと思います。賢治のお話しにはいる前に近森先生についてふれておかねばなりません。先生は兎田部落の御出身でお家は旧富家村きつての大地主で盛岡高等農林学校に学ばれたのち若くして富家村長をなさっておられたこともあります。村議会を某料理店に召集したといわれる伝説のある程の酒豪でしたが、常に飄々磊落凡人と異なるお人柄でした。村長をやめられ長らく県立農業学校の先生をなさっておられました。わたしが農業学校に入ったのは昭和十六年、太平洋戦争開戦の年でしたが、先生は御健在で村長さんのニックネームで生徒の誰からも親しまれていました。昆虫や鉱物の授業を担当されておりましたが、その頃は軍国調一色で軍事教練や勤労奉仕に明けくればの日が多くなって先生の授業はほとんどなくなってゆくような時代でした。そんな中で私達最初の鉱物の時間に「わしの若い時鉱物の好きな奴がいて、其奴に連れられて岩手の山をあちこち歩き廻ったものだった」ということからはじまった授業のことは今でも昨日の日のように思い出されます。先生の授業は凡そ戦争とは無縁でお人柄を反映して春風駘蕩私達をしばし真の意味の学問の楽しさに誘いこんで下さるような時間でした。後でお聞きしましたところその鉱物好きの奴が賢治であったのです。

昭和二十年戦争が終って農地改革などにより先生のお家も環境も大変化を来しました。御殿のようだったお家も売られ農業学校も退職された先生はお蔵を改造されたお家でひとり暮しをなされていた時代がございました。私にはそれが晩年の俳人小林一茶の境遇と重なって思い起されます。この時分の或る日、それは昭和二十六年の晩秋の一日、先生のお住まいをおたずねし、賢治のことをお話していただきました。これから先、私というのは近森先生御自身のことです。

『賢治は盛岡高等農林学校で私より一年上であったが一学期が終ると寄宿舎で同じ室になり賢治が室長であった。』

私は卒業後、女のことと失敗した友達と農業や病虫害などに関する本を出版する機関をこしらえたが、杜陵出版部というこの名前は賢治にたのんで名付けてもらった。

その後、賢治が童話を書き中央の雑誌にのせてもらおうと交渉したが問題にされず、又文士もこれは教訓的でないとか言って殆ど顧みられなかった。しかし、賢治は「子供に読んで聞かすとおもしろがる」と言って杜陵出版部から自費出版した。この本は殆ど売れなかった。

賢治の家は古着屋をしており、又父が株の商売をしておったのでこの株を売るために彼は度々上京しておった。父とはあまり仲がよくなかったように思う。私が賢治の家に行った時も食費も父親に支払っていると言っておった。又この時賢治が菜食生活をしておるのを知っ

た。寄宿舎では他の者と同じものを食っておった。賢治はこれについて精進料理食うと元気を発散することがなくてよいと言っていた。彼は女については殆ど無関心であった。

宗教は学生時代盛岡の町に真宗のお寺がありそこへよく説教を聞きに行った。私もついに行ったものだ。その後、関という先生が「上野公園で法華経の旗を立て頭を坊主にした賢治らしい者が説教しているのを見かけたが賢治は氣違ひになりやあせぎっただろうか」とたづねてきたということを人伝に聞いた。

賢治は人の悪口を言うことはちつとあつたが人を憎んだりすることは決してなかった。

或る時、半紙大のものに賢治が格言とか常識とかいったものを箇条書きに印刷し私がたのまれてそれを芸者とかそういった女のいるところに十枚ぐらいつづ束にしてばらまいた。賢治は料理屋などに行くことは殆どなかったが、或る時私につきあつて田舎のある料理屋に行った。この時出てきた芸者（少女）に後で本物の宝石の指輪をやったのに驚かされた。弱い者への同情というべきだろう。

賢治は後に蓄音機を買い洋楽を聞いておつた。「私はわからんが洋楽も名歌手が歌うと謡曲も同じく腹から声を出しているのが相通じるようだ」と言ったら「お前はわかるじゃないか」と感心して言った。

賢治は歌も下手、音痴で楽器もようせず字も下手、力も私程なく天才といった面は一つもなかったが、普通の人とはどこがちがつていた。詩は学生時代から作っていたが同級生の河村某なんかに比べると問題にならなかった。動物とか植物なんかに対する趣味も殆どなかったようだ。作物栽培なども殆どしなかった。玉蜀黍の品種にカンツリゼンツルマン（田舎紳士）というのがあつたがこれを非常におもしろがつてよく口にしていた。

賢治は農芸化学をやっていた。私は賢治について鉱物採集、地質調査にしょっちゅう行つた。賢治はどちらかと言えばムラ氣であつてコツコツ長続きする仕事はしなかったようだ。

友達は少なく交際したものはおそらく私ひとりではあるまいか、私は大正五年頃から昭和初年までの間、長崎に二三年おつた間を除いて賢治と交際していた。

私は卒業後二三年間盛岡中学で教師をしていたが、この生徒の中に賢治の弟、清六がいた。賢治が亡くなってからこの弟から賢治の遺言だといって法華経を送つてきてくれた』

以上は近森先生からお聞きした話のあらましであります。

今日偶像化された賢治のイメージとは少しちがうところもあるかも知れませんがこれはこれで賢治の本当の姿だったと私は思います。

「ワタクシの幸福ではなくワタクシタチミンナの幸福」を願つて大正十五年花巻農学校の教師をやめられ、東北のそれもおしんの少女時代のような農民の位置に自分を置き、自炊生活をし、荒地を開墾、農業に従事するかたわら、花巻及び近郊の農村数ヶ所に肥料設計事務所を設け、無料で設計相談に応じ二千枚もの肥料設計書をつくつてやり、また農村を巡回し肥料、稲作の指導講話し文字通り「ヒデリノトキハナミダヲナガシ、サムサノナツハオロオロ」歩いた賢治が過労のため昭和八年九月二十一日午後一時三十分僅かに三十八歳の若さでこの世を去つてから今年は五十年になります。

賢治は生前、心象スケッチ「春と修羅」と童話集「注文の多い料理店」の二冊を自費出版しています。注文の多い料理店は盛岡杜陵出版部、東京光原社が発売元で、その発行者は近森善一となっております。

四 長谷部伸作氏のインタビューテープ

次に紹介するのは、昭和四一年九月一五日、長谷部伸作氏が野市町の近森善一宅を訪ねた折り録音したものである。時に近森六九歳。私がテープ起こしをしたのは、録音した内容の全てではなく、オリジナルテープから長谷部氏が五四分ものカセットテープにコピーし直したもので、前後がいまだすこし残されているとのことである。私が独力で聞き取れた部分が八〇パーセントほど、そこから小松亮氏の力添えを得て、結果として九八パーセントほどまでは再現できたように思う。ただ、本稿で紹介するにあたっては、読者の便を考え、土佐方言は共通語に改めることとし、さらに、文脈を整えるための多少の付加、省略を施したことをお断りする。テープ冒頭の話題は及川四郎と東北農業薬剤研究所の設立に至る経緯である。印は意味不明箇所、「」内は長谷部氏の言葉を意味している。「」は基本的には会話であるが、文意を取りやすくするための目安として付した。

なお、カセットテープ（コピー）とそれを忠実に活字化したものは、長谷部氏のご配慮で宮沢賢治学会イーハトーブセンターに寄贈される予定である。

*

……この事が起こって、それからわしが始末をつけに行ったので、納得して、ちゃんと始末していたが、やっぱりいかん、子供ができるようになっておりましてね。そんなようなことで、それではもう、「うつっちゃっておいて勝手にやれ」ということになりましたね。それから、「ああ勝手にやる」と言って、牛乳を、牛を買って、それがちよつと失敗しましてね。もうわしら卒業していた時ですが、その当時に、学校で共済みたいな金を貸す制度がありまして、それで、新しい細君が花生けの先生をしたり、お琴の先生をしたりしていましたが、そのいろいろな道具を持って来て、「これを抵当に入れておくから、おまえの学校で借りられる金を貸してくれないか」と言ってね、共済組合みたいのをね。それから貸してやりました。貸してやったところ、「それくらいではとてもいかん。子供もできるので根拠地を構えねばいかん。家も構えねばいかん」ということになって、それから、ちよつと、岩手県町の西北（にじきた）に厨川の柵といって、安倍貞任のおったところがあって、あそこの近くに騎兵の旅団がありましたね、「ありましたね」その旅団長が借りていた家の家主のお母さんが、「旅団長が気に入らないから」といって、頭へきて追い出したんです。それで大きなものが空いているんですね。それで、わしにひと間でもふた間でも借してくれんかと思って談判に行ったところ、それへうまいことわしが当たった。人が聞いたらおかしい話ですけど、後で聞いたらね、井戸の水を汲みましてね、つるべでね、それで縄をこう引っ張って、ひ、ふ、み数えてうまくめなかつたら貸さなかつたらしい。それでひと間借りました。大きな家だったので、そこへわしの友達を置いて、「及川さんですね」それでまあ、お産がすんで子供ができました。それで、何かやらんととても大ごとなので、農業薬剤ですね、果樹へかけたり、蔬菜へかけたりする、今みたいなよいものがなかったの。「それをこしらえて売りたいので、君はちよつと手伝ってくれ」ということで、わしはそんなことは専門でやってましたので、そこへわしが行って行って、指揮して、売る方は及川君が売ったですね。やってみたらそれが意外に売れ出した。それで今度はわしもその家を借りましてね、一緒にそこに移って、それから、手伝ってくれる人たちにも、広い家だったので間を貸して、そ

こでまあ薬をこしらえて売るということになってやり始めたです。やり始めたところ、やっぱり説明書を書かなければならんですね。それで「お前書いてくれ」ということで、説明書やら、ちよつとした簡単な虫のことやら、病気のことやら書くのを出版してもらって、印刷屋に頼みましてね、それが出版してやったところが、それがばかに売れたです。その説明書みたいな本が、五〇銭ほどの本だったですがね。それが田舎へも全国的に売れましてね。「病虫害の説明書のようなものですね」ええ、ごく簡単なね。あんまり売れるんで、それで若干銭ができました。それで、及川君おもしろくなったので、ひとつ出版屋でも、出版屋よりももう少し大きなことをやろうかということになってね。それなら、農業用の教科書や病虫害の方に關する教科書がろくなのがないんで、「おれが原稿書くから、それを出すか」ということになって、それで東京の方に頼みましてね、もう出版するように準備していたところが、震災になったです。東京のね。震災になって焼けてしまったでしょう。それで、東京では出版できんようになりましてね。で、岩手県のおまり大くない出版屋だったが、その息子が美術学校の、東京の美術学校の彫刻、何かあんな版をやるような科目を卒業したのだった、東京が焼けたついでにここでやり始めてね、一旗あげるのでは非やってくれということになってね、その段取りをしたのです。そしたら宮沢がやって来てね。よく来ていましたね。わしらの名前はね、師範学校の先生の習字の先生に「ひとつ看板を書いてくれ」ってわしが言いました、わしが大きな板を買って来て、東北農業薬剤研究所というね、大きな看板をね。ほら、もと旅団長が借りていた家だから、家も広いしそれから馬屋もあるしね、馬丁などを置く部屋もあつて。それから屋敷がね、二町か三町あつたか、二町歩はたしかあつた。そんなような大きなところだから、まああの辺はだいたい大きいんです。その農業薬剤研究所に宮沢がやって来て、「これはちよつとよくないぞ、商売するにはこれは。名前変えてやるから」と言つて、光原社という名前にしました。「それは宮沢さんが」そうそう宮沢がつけて、光原社というのはそれが元です。「印刷なんかやったわけですか」ええ、それからね、ぼつぼつ出版をやりました。いろいろね。しまいになってくると、わしらじゃなしに他の人の出版もやりました。農業学校の教科書をだいぶしました。幾通りもね。十通りほど出版したかどうか。それで、かなり景気がよくなつてきたです。その時ね、宮沢がね、おとぎ話書いてね、それから、詩も書いて、あの時分には詩は自分もそんなに自信がなかつたようだ。おとぎ話は出版してやろうと思つてね。だれか東京の、わしは忘れたけれど、小川未明という人があつたでしょ。わしはあの人だつたように思うが。「その人が、鈴木三重吉さんかですね」とにかくね、わしもその時分には知っていたんだけど、そこへ行って見てもらったということだ。見てもらつたらね、ぼろくそに言われたということだ。わしはちよつと思ひ違ひして他にあつたかもわからんが、何でも「内容に教訓的なことがない」というような批判をされた」と言つてね、怒つてわしのところに来たですよ。「読んでみてくれ」と言つてね。わしは読んだら、ひとつ何か「注文の多い料理店」かしら、あれは分かつた。他のやつは何が書いてあるか一向分かんないのだ。「俺はこれはひとつも分かん」と言つたらね、「そりゃ、おまえさんが分かんないのでは困る。こつちの言葉で書いてあるから、まだおまえさんは知つているといつても十分には分かつていないから、俺が子どもを連れて来て読んで聞かすから、子どもが喜んだらどうだひとつ出版してみてくれないか」ということだ。それなら子ども呼んで来いということだね、それから子どもを一〇人ほど集めてきた。読んだ子どもは喜ぶんだ。わしは分かんないのだ、そのひとつも。どうもしっくりこない。そんなこと考えた

ら先に進まんので、とにかくそれなら段取りしようということになってね、段取りし始めたです。そこから先はわしはちよつと忘れてましてね。その時分わしはこんなことをしていたです。馬を山へ放牧するとダニがつきましてね。仔馬やら、こんな首に集まってきたりして、それで木へこすりつけたりして、ここをすりむいて、それがもたなくなって病気になったりするんだ。それから、親馬にもずいぶん付いて困る。その時分にはそれに効く薬がなかった。それで、いろいろやっているうちに、まあ、あてずっぽうに当たったです。それから、旅団の騎兵の下っ端のやつらがね、「それはおまえさん、牧場にもって行って売りに行ったらいい」と言つんだ。「これはいい」と言つて。それから、騎兵の旅団には売らんかったけれど、だいぶやったことがある。そ

れからその薬をこしらえて、まあ、浄法寺といって、岩手県の北の青森、秋田の境のところについて、うんと大きな牧場がありますからね。そこへためしに出て行つたです。見本の薬を一箱送つておいて。行つたところがやつぱりろくに商売を知らんでしょ。で、売るといふ段になつたわけですね。そこに、村に獣医があるんですね、点々として。ところが、そいつがなかなか幅をきかしてゐるんだ。今考えると、わしは獣医ぐらいだと思つていたけれどもいかなのだ、実力があるから。そいつへ何か持つていくとか何とかうまい手はあるのだけれど、こつちはそんなこと知らんでしょ。それだから、商売をどうするということが決まらんうちに戻つて来たです。そして、戻りにね、あれは何とかいふ宮様で、オリンピックの關係の時での大將株みたいなことをしていた、竹田の宮様じゃない、何か騎兵隊の宮様だ。その人がその視察に来ていましたね。一緒に汽車で帰るのに乗つたですわ。その宮様を案内していた將校が、わしはその時分盛岡の中学校の教師をしていたですが、そうだ、その人がその、同級の將校が盛岡中学で教えていたのが、少佐になって、止めて、ああそうそう、宮様のおつきの人と、わしと同学校の先生とが友達だった。それから、「おまえ何しに行つていた」と言つので、「こういうことでダニを殺しに売りに行つただけで、うまいこと商売になるかどうか分かん、及川をやらんと。どうもわしは商売はへただし要領が分かん」と言つたら、「それならちよつどいい。そのお話をしてくれないか」と言つて、「いま青森の方に行つていて、盛岡で今晩泊まるから、まあともかく、同じ部屋のなかへ乗せてやる」と言つて、それから、宮様の乗っている列車のなかに乗せてもらつたですわ。乗せてもらつて、「話をしろ」と言うのだけれど、不動の姿勢で話をしろと言われたつてひとつも立つちやいられない。あの時分には、宮様だから。わしは足元がふらついていていたけれど。そしたら、「晩にお呼び出しがあるか分かんから、今晩出られんぞ、家に居れ」と言つてね。それから何だ、晩に疲れたのだろうか、連絡しても来なかつた。そんなことをしている時に及川君がね、下絵のね、宮沢賢治のおとぎ話の挿絵ですわ、あれを書く人を見つけたものだ。そこをわしはどうもはつきりとは分かんのだ。その人に会つたのやら会わなかつたのやら。なにしろ、わしの家に来て永いこと泊まつて、わしが米を買つてやつたら食つてしまつて、あの時分にはそんなによいものは食わなかつたが、鰹節を食つてしまった人もあるから。さあその人だったかよく分かん。ともかく先生だったんだが。及川が二、三年前に詳しくその人のことを書いて送つて来ていたが、人が再々聞くけれど、思い出せんようになっていて、それから、あの人に描いてもらつたですわ。それを妙にわしは、その人の顔もね、どんな人だったか、来ていて飯を食つた人やら、その間に来て描いたやらさつぱり分からん。あの人もわしは思うに、絵を描く方も宮沢賢治も来て指図していたと思うが、絵を少しづつ描こうとしても分からんか

っただろうと思う。わしはみんな意味が分からなかった。それで、とにかくできあがった。できあがるように段取りができたですな。それから何ですわ、これはいつたい、宮沢が何だと、商売になればどうなる、俺が印刷費を出したところだ、これは売れんぞ、一つも、まちがいなし売れんぞ。それから、俺もこの印刷費を自分で被って出してしまったら困る。まだようやくやっている状態だから、それでどうするということになって、「印刷費は出来上がりがさえしたら俺が心配するから、出来上がらしてみてくれ」と言っただけ。それからまあ、その時分には表紙やらね、あつちでは出来ませんからね。東京の焼け残りのところやら、腕の立つ人に頼んだりして、出版は盛岡でしたけどね。職人やら、腕立ちの人じゃないと綴じられんですわ、田舎の人はね。「そうですね」焼けた当時ですからね、来てくれたらと思うが、あつちは持つて行かんかったように思う。それで出版できた。それからね、それからひとつも売れんのだ、はたして。その時分は教科書をだいぶやりましたから、方々へ卸屋という店ができていたです。あれがね、なかなか難しいものでね、準備もせずに突然出版したので、卸店がひとつも取り合はんのですよ。ばかにして。それで、取り合わんかったところが、東京辺（へん）とか東北地方は、農学校へわしらの先輩やら後輩やらが教師として行っています。その人たちが取ってくれるのでね、それで自然と卸屋が取り扱ってくれるようになりました。東北では大きな卸店というには仙台一軒ほかありませんが、何とかいう卸店があつたな。それから東京と、そこはまあじきに卸店になってくれたです。そこへも送ったですわね。あの、やがて賢治のを送って、卸してもらったところが、それが売れんのだ。それは当時、古い時代なので、読んだらわりあい東北の人だったら分かるかもしれない。妙にわしには分からんのだ。今考えてみると、もう少し読み直したら分かるかも知れんが。それから、何でしたよ。ええ、そうか、それから、光原社の方はね、卸店を広げなくてはいいかん。大阪から九州の方へね。中国、九州の方へ。それでわしも九州にちよつとおつたことがあつて、そこで一緒にあつた男が一人教科書を書いてあつたので、それへ原稿料を持つて行き方々、卸店屋を広げたいと思って、大阪へ来て、あれは何という卸店だったか、そこへ行くのと、トンボやチヨウチヨウを捕まえる小学校、中学校専用に補虫網を、外国からくる荷物の外の鋼鉄の古いバンドを使つて網をこしらえて、売り出そうとしていた。それから、わしがそこへ行っている話したがろくに取り合わなかったで、置いてあつた網をねじくつたりたんだりにしていたんだね。そしたら、「おまえさんその網を上手にたたんだり、そんなこと知っているのか。これは専門家だ、まあちよつと上がつてくれ」と言つたのでね、それから上がつて、「ご商売に来ている用件は分かったので、私の方が引き受けますが、そのかわり、網の方がどうもうまいかんところがあるので、欠点を教えてくれんか」と言うんだ。それじゃまあ、卸店になつてくれれば教えてやるということになった。わしが知っていることはむこうもなかなか知っているけれど、どういっても、やり方などにまずいところがあつて、直すところは直して、それから、柄へ付けるところは、こうね、もつと改良してね。ちよつとできるように教えてやつて、それから、網の色がね、妙な色だったか「それはだめだ」と言つて、どんな色でもいいというわけにはいいんですよ。中へ入った虫が小さいと見えんでしょ。そんなこと言つて話しをしていたら、ちよつどお昼ごろになった。「ひとつ今日はご案内いたします」と言つて、大阪の、劇場があるところで、道頓堀だったろうか、大阪はよく知らんのだ。そこに案内してもらつて、御馳走になりました。そうしたら、雷が鳴りだして、多分あの劇場の近くへも落ちたと思う。どこへかも落ちたといつて、ひど

く怖い思いをしたけれど、酒を飲んでいたので元気なもんで、まあそこは済みましたがね。それからずっと九州へ行つて、九州の熊本にわしはおった。それから、そこで話をつけて、それでようやく、本屋と卸店がまあ全国的に広がった、と、こういうことになったです。それで、まあ第一段落だったですわね。それからね、わしが家へ長いこと戻ってない、おおかた一年半、二年近く戻ってなかったもので、家に戻らなければいかにいうことで、家に戻って来たんです。そのときに、あの何ですわ、選挙がありましたね。全国的にあったと思う。その選挙のなかへわしを巻き込んだですよ。わしは格別何だ選挙というものはひとつも知らなかった。盛岡の町は原敬が一人で独占してましたので、選挙というものはなかったんです。それだから、十年ほどあつちにおりましたけど、選挙がいつあつたかひとつも知らなかったでしたね、原敬が殺されるまでは。その時は殺されていたのか、ちよつと忘れてしまいました。それから、何でしたよ。うちに戻って来て、そう、選挙に巻き込まれて、監獄へ入って、未決で入って、　　ってやられて、それが出て来て腹が立つて、こんどまた村が騒動になって、親父なんかみんな一緒になって、村がわいわいい出してね。それから、あの時分には村長も選挙じゃなかったですから、有志が集まって、誰がやれ誰がやれというばかりだった。それで、有志会こしらえてやったら、こんど喧嘩みたいになつたのでなり手がないでしょ。それで、「どうしてもなり手がなかったら俺がなってやる」と言つたんだ。「そんならやれ」ということになってね。「勇気があればやってみる」ということになって。何しろ若かつたのでね。それから本屋ほつたらかしに、こつちでこんなことをし始めたんですわ。そのうちに女房もらい、親父が「こんなことをしていたらろくなことがない」と言つて、三十になつていましたので、こつちに戻つて考えてみたら、あつちに行つて本屋してもらうことがない、食うことができないので、こつちにおつたほうがましのように思えだした。それから、「おまえがもうやれ」ということになって、それから、わたしは譲り渡しましたがね。「及川さんがずっとやっており」え、そう、今もやり「いまも及川さんがやって」やつておる。なかなか盛況にしているらしい。「第一回目の処女出版を出されたという」ええ、そうです。それからね、そこにはないでしょうかね、幾つも来ていましたので。わしも忘れたが、賢治の出版の紙型が残つていて、後でまたほかの人も出版したらしい。「ああ、そうですか」わしが出したときの紙型が残つていて。それだと思う。「賢治はその本を出した時分にはどこにおつたわけですか」家におつたです。あ、家じゃない、あれは農学校、農学校の教諭していたのじゃなかったらうか、花巻の。「花巻の農学校の」ちよつとわしの話は前後するかもわかりませんよ。「そうでしょうね、たぶん」わしもいつペン行きましたね。農学校に勤めておつたように思う。それからその前には、なんの時に行ったか、あの、詩を書いたりね、そんなことをしていて、妙に小さい家を建てて、わしはそれを見なかったが、どこかに建てたというけれど、そんなところへ行きもしなかった。農業相談所のようなことをしてね。「そうらしいですね」肥料のね、「この本は近ごろ出た本ですが、『年譜宮沢賢治伝』といって、ここに、やはり花巻農学校の時代ですね。ええ、このように書いてあります。

（以下の鍵括弧内堀尾青史著『年譜宮沢賢治伝』図書新聞双書、昭和41・3よりの引用、朗読　注鈴木）「さて『春と修羅』を出して意気上つていた賢治のところへ近森善一という人物があらわれた。近森は盛岡高農農科を大正八年卒業したから賢治の後輩になる。この人物は同級生であつた及川四郎と共同で『病虫害駆除予防便覧』という五〇銭のパンフレットと『チカモリン』なる農業用薬剤を製作し」「チカモリンというものはこしらえなかった

ですよ、そんなもの。「その売り込みに農学校へやってきたのだ。そのとき『春と修羅』のはなしが出、童話ならなんぼでもあるよ」といつて賢治がドサリと原稿を出してみせた。近森はそれを盛岡へもって帰って及川に見せ、『だそうじゃないか』『うん、だそう』ということになったのである。勇気りんりんたる若者でないとできないはなしだ。ところがまもなく近森善一は父親の選挙のことで郷里の高知県へ帰ったので」とこう書いてありますね」そんな、そんなよう。「それで、光原社、それから東京の吉田という方、東京の吉田春蔵という」出版屋ですか。「そうらしいですね」それはね、東京へ出版屋をこしらえておかないと、本というものは東京に本店がある本でないと、盛岡辺で出したらその当時は売れないんだ。震災の時はまあ別だけれど。大阪でも京都でもだめなんだ。みんな東京の、東京出版じゃないと。で、そんなところへ行って頼んだんだ。「そのチカモリンという薬がしらみを殺す薬」あれはね、しらみの薬はね、それは師範学校の図画の先生が名前つけたんですよ。仏様のね、大きな、あれはなかなか上手な先生だった。仏様の頭へしらみが立っているポスターをこしらえてね。その先生が原稿を自分でこしらえてくれたんだ。それを印刷しようと思つて、印刷する所を知っているものがいて、それで、暇なもので、今みたいに忙しいとそんなあほな奴はおりませんけれど、で、こしらえたです。チカモリンじゃなかったように思う。そんな名をまさかつけんと思うけれど。「それじゃ、薬の処方は先生がやられたわけですか」いや、商売は盛岡「いや、薬の処方は」そうそう。あれはいつペン県の許可を取らなければならん。《テープ中断》 農業の方はかまわなかったけれど、しらみの薬だということになると、薬事法で県で試験を受けなければいかんからね。そんな薬をこしらえてかまわんという資格を取つて、それからしなければいかん。そのしらみというものがね、わしはそんなものがあるとは知らなかったのですがね。まあ、この辺の者はあまり知らなかったのですわ。ところがね、学校の先生の細君につるだとか子どもにつるだとかということがよく起こつて、わしが毎日そこへ呼ばれるんですわ。「そのころ近森さんは盛岡の中学校に」ええ、中学におつて、及川を手伝つてあげておつた、薬をこしらえて。もつとはじめ、「盛岡の高等農林に近森さんは進まれたわけですね。済まれて、それから、どこかにお勤めになつたわけですか」いや、済むとね、わしは研究科の方に残つてね。それで、虫の方をやつたですよ。「ああ、そうですか。そのころ宮沢さんはもう卒業されておつたわけですか」宮沢は一年上だった。「ああ、そうですか。寮が一緒だと聞きましたが」あれは二期期だったろうと思う。宮沢が二年でわしが一年のときだから。「近森さんが一年生で、宮沢さんが」二年生のとき。二年でそれで宮沢が室長をしていた。「同じ部屋の室長」ええ、そうそう。六人おりましたね。その時にね、実習をやらなければならんでしょう。わしはやつたことがないんだね。もう二期期になつていたからだいぶやつてはいるんだけれど、そうだね、馬のくそ、堆肥を積んだりということはこちらではあまりやつたことがない。それから自分もやつたことがないもんだから、みよように汚らしくてね。「取ります」と言つて、「これは何で取りますか」と言つたら、教師の横川という人が「手で取らなくてなんで取るんだ」と言つて、「おまえたちは第一おうちゃくだ」と言つて。それから、履いている足袋はまだ地下足袋のよいのがなかった、そのころは。ゴム底じゃなかったように思うが。はじめのときはゴム底でない地下足袋だったように思う。そいつを買つて、ぶらさげておいたら盗られる、誰が盗るか知らないが。 ね、繻子の上等な足袋を買つてきてね、そいつを履いてやつたんだ。それが第一しゃくにさわつたんだらうねえ。あの何だ監督がね。 、それで、ひどくしか

られたものだからすっかりおもしろくなってしまうて、実習が嫌になってしまったんだ。それで、よし俺はもう学校を止めてしまおうと思つて、どこかへかわつてしまおうと思つていた時ですがね。宮沢が、「おまえさん、いかにいかに、どうせ百姓はしないんだ。俺と遊びに行こう」と言つて、あの辺を方々連れて行つてもらつたことがある。行つたらね、温泉を見たことがないでしょう。初めてでしょう。それから、湯が湧き出ているところもめずらしかつた。山の中の湯の出るところへ行つたら、何だ、下の方で人が入っているんだけれど、上の方ではヒキガエルがいっぱい飛び込んで死んでいる。もう骨になつてね。それから、鉱物がね、岩の間からこつじわじわ出てきたやつが固まつてるでしょう。ルビーや瑪瑙だというものがね。それから他の鉱物、こつちにはない、結晶しておりますが。それがとても珍しくてね。それから宮沢に習いはじめたんだ。それで毎日一日中二人で、学科そつちのけにして歩き回つたです。それで方々へ泊まりがけで、田舎の家を借りて泊つたりしてね。その時分に、宮沢はぼつぼつ歌を書いておりました。「岩手山なんかに、よく登られたらしいですね。宮沢さんが」ええ、わしも一ぺんか二へん上がったけれど、上に上がると風が吹くでしょう。それから雲が来るでしょう。それでちつとも眼鏡が見えんようになってしまふんですがね。天気の良い日だったらいいけれど、悪い日に上がつて、風のせいで吹き飛ばされてひとつも歩けんのだ。それからわしも山に上がるのがおもしろくなりましてね。あそこに岩手山という山がありますね、富士山の片一方。それからもう一つ早池峰という山がありますね。それへも上がつたりして、それからだんだん山登りがおもしろくなつて、こつちの農学校に来た時分も、初めのうちは方々へ生徒を連れて行きました。信州辺から富士山なども。「そうですか。盛岡高等農林を済まれて、それから盛岡で先生をされていたわけですか」それでね、研究科が二年ですがね。おりましたところ、となりが中学校でしたが、その中学校の校長さんがね、わしが高知で中学校に行つているときにね、同級生のお父さんがね、まえに第二中学校といつて、あそこの、まえの高等学校があつたところ「小津町のね。いまの毎南中学校、城北中学校ともいつていた」いい、そうそう、第二中学校。あそこの校長さんの息子とわしとが中学生の時に同級生で、それから、中の橋のもとに下宿して、「高知の中学校はどちらの中学校に」海南です。それでそのとき教頭していた人がおつたです。それが校長になつて盛岡に来ていたんですわ。それで、わしを見て、「おまえずいぶん太つたなあ」と言つて、それから、あの時分には博物の方の教師が非常に不足していた時代だつた。「いまの理科ですね」あの何だ、戦争の後の好景氣だつたので、それで、「教えに来てくれないか」と言つてね、朝だけ。それで朝三時間教えに行つたですわ。「研究科に残つて」ええ、研究科に残つて、それはまあ承諾を得てね。それからそのうちにね、まだ二年になつていない、一年のくらいかな、そうしたところが物価がだんだん上がりだしたです。あの時分にね、物価がうんと上がりだした。それでどうも、「おまえも親父にもらつたやつで生活していたらいろいろ苦しいだろうから、上げてやりたいところだが、ほんとの教諭にならないことには上がらないから、教諭にしようか」と言つてね、まだ研究科の方を卒業していないから、「主任の先生に相談して見てくれ」と言つて、そしたら上げてくれましてね。「こつち物価が上がつたらどうしようもないから」と言つて、ええ、何倍にもなりましたでしょう。それで、校長には黙つてなつたんですが、主任の教授には内諾を得ましたが、その校長が、それで教諭になると新聞に出たんでしよう。新聞に出たのを校長がまたそれも見つけたですよ。ええ。よく覚えていたものだわしは感心しているが、これはどうもいかにとい

うことになってね。「研究科の学生で教諭になって」それから徹夜で論文みたいのを書き上げたものだ。そいつを書いてね。それからまあ通ることになって、早く出たですわ。それから教諭になっておったです。「卒業早めたんですね」早い。「その時宮沢さんは花巻の農学校におったですか」おったです、その時分は「宮沢さんも研究科へ、地質の方」そうそう、あそこにおったです。「土壌学が何か」ええ、関という先生がおりましてね、その人の下にありました。「あの時分はのんびりしたおもしろい時代だったですね」何しろ今みたいでなくのんきなもんですわ。それから、わしが中学校におったところ、校長がむかし細君を亡くして一人でおったですがね。おばあさんがおったかもしれないように思うが、「それへ後妻を世話しなくてはいけない」と言つてね。それで教師はたくさんおるけれど校長の所へ行き手がないわ。図画の先生にだまされてね、森田という今でも覚えてるがなかなかおもしろい先生だった。「おまえ今晚あその先生用事があるので、ついでに話してやれ、それから俺がいった通りに言つてみる」と。年のくつたずるいやつだった。そいつに習つた通りに言つてみたんだ。「校長さんのところに行つて」そう、晩に呼ばれて行つてね。そしたら、こんこんと言つて聞かされた。「そんなことおまえらのような年の若い者が言つにおよばない。いろいろ家庭の事情があつてやつたことだから」と言つて。あの先生しまいどうなつたろうか。もうあれで止めたろうか。「その後、宮沢さんの本を出版する話が出たというわけですね」いやそれからね、待つてください。まだまだあるんだ。それから続くんだ。それからその中学校におったですよ。おったところがね、校長がしゃくにさわっているんだ。何年も黙つて教師になつて許可を受けていないからね。わしが一人でできるということは、校長も分かっているけれど、主任の教授らが悪いわね。校長が推挽していたんだね。呼ばれて校長室に行ったところが、「おまえは中学校には向かない」と言つんだ、農科だから。中学校では先々、校長にもなれない教頭にもなれないと。「俺がちょうどいい口を見つけたから、そこへ行け」と言つんだ。ひどく迷惑なはなしで、「どこへ行くのですか」と聞いたたら、「長崎の諫早というところだ。そこへ行け」と。むかしはそんな勝手なことを言つたもんですね。

それから、なにに相談したところが、「遠いけれどもおれなら行くぞ、ひどく遠いわけではないので、まずあそこへ行け」ということになった。「こつちにいても校長がにらんでいるから」と言つて。それからそこへ行きましたわね。「長崎へ」長崎へ行つて、学校へ行つたところがね。校長もいない、教頭もいない。他の先生はいたけれど。誰か責任者はいないのか、わしはここに転任してきたのだから、新規に来たのでなく、転任してきたんだから、中学校からね。こんどは、書記に聞いてみたところがね、「俺は分からない、まだここは知りませんよ。だいいちストライキがはじまつて校長は行方不明だ」と言つてね。それから、「教頭はもう出て来ない。当分はだめだ」と言つて、「県庁行つて聞いて辞令をもらつて来い」と言つんだ。そんな学校。妙なところへ来たもんだ。それから、駅の前の宿屋にきて、来てね。あわてても仕方ないので、そこにおつたわけです。おつたら一人ね、隣の部屋にきたお客がね、その農学校をぼろくそに言つんだ。「けしからん」と言つて。「俺は転任して来たんだが誰もおらん」と言つて。それで、こいつもやられたと思つて話したところがね、それはもつとわしより気の利いた男だから、「俺はとにかく県庁に行つて来る」と言つて、県庁で事情を聴いたんだ。そしたら、県庁が師範学校出身者を校長に新たにしたらしい。すると、こつちの農学校の卒業生がそれへ反対した。それがもつとで農学校いきと師範学校いきとがね、大喧嘩になつたんだ。「それでストライキが起きた」それで全然見通し

が立たないということになった。それで古い教授を県が独断で止めさせてしまつて、新規採用したんだね。それへ来たもんだから、そんなわけで学校の方はもうひどく怒っているんだ。そのほら、もう止めさせられてしまうから。それへ新規に来たでしょう。それだから、「何もかも見通しが立たない」と言つて、それはとにかく困つたことばかりあつたので、一月ほど宿屋におつたろうか。そんなことで何もくれんのだ。転任料もくれん。あの、盛岡から長崎までだからずいぶん長い、あんな長い転任料、後で大分みなに飲ませてしまつたが、そんなわけで月給もくれんでしょう。わしは宿賃を払うこともできない。それで親父にまた出してもらつて、やつたことはやつた。あんなひどいことはない。「それでそこに何年かおられたわけですか」一年ばかりおつた。「それからまた盛岡に帰られたわけですか」それからね、もう教師を止めてね。もう少し他のことでもしてみようと思つて、あの時分には何だ口は沢山あつたですわ。県庁あたりはね、ここの県庁に來いと言つてね、言つたけれど県庁あたりは無理に行かなくてもかまわなかつたですよ。余計に口があるから。それで、まあ、何とかしてみようと、従兄弟が東京におつたので従兄弟のところへ相談に行つたです。東京に行つたところが東京で偶然に友達に会ひましてね。科は違つていたが同期で、そいつが、「俺は実はまだ卒業していない」ということだ。どうしたのだということになつたところ、「俺は落第をしていたけれど、それを隠しておつた」と。隠していたけれど、しまいはとどのつまりばれたですね。ばれたところ、困つたもんだけれど、兄貴が三越のデザインの方の課の係長をやっているというので、それへ「おまえが行つて断りをしてくれ」と言つて、え、また妙なことを頼まれたことだ。それから、上野の公園の、忘れたけど、あそこの辺からこう入つて先の方のところだつたが、とにかくそこへ行つた。行つて、まあいろいろ事情を話して、「こらえてもらいたい、ともかく学資のめんどろをみてもらいたい」と言つて、話に行つたですわ。なかなか細君がよく話の分かる人でね、「それはそんなご心配におよばない。親父が怒つたらわしの方から金を送る」と言つてね。それがそこで話がついて、御馳走になつたですわ。それがまた悪い。酔っぱらつたでしょう。酔っぱらつて上野から電車に乗つてね、従兄弟の家まで帰るうちに、まだ電車が動いているのに、どこかの降りるところで飛び降りたんだ。あんなこと前にはよくやつたもんだが、酔っぱらつていたもんだからひっくり返つた。手やら方々傷つけてね。それから、子供の時から指が少しきかなかつたので、それからまた盛岡の温泉に行つたですわ。ほかの温泉は高いので、盛岡には安い温泉がいっぱいありましたから。待てよ、それはちよつと前後する。待てよ。それから、盛岡へ行つて、そうか、わかつた。中学校のころは光原社には関係ない。中学校に行つていた時分は。それからね、盛岡のちよつと手前の、繋か何とかいう温泉におつたけれどね、わしは温泉にひどくのぼせてね、湯に入るとのぼせてかえつて悪いみたいだ。それからまた、学校にひよつこり遊びに行つたですわ。そしたら主任の先生が「おまえは何をしているのだ」と言うので、「何をしているというわけではない。東京で転んだから温泉へ来て、しばらく居てみようと思つて来たけれど、湯へ長くつかつていたら、のぼせてひとつもよくないので、まあちよつとここへ遊びに来たんだ」と言つて、「高等農林へ、」ええ、ちよつと挨拶方々来たんですわ。行つたら、「もう少しここに居て何とかやつてみる」と言つんだ。それから、助手に入つてね。やつていて、それから及川と知りあつて、及川が金を借りに来て、そうそう卒業していたから金を借りるわけだ。学校の方で金を借りたから。「ああそうですか。及川さんが結婚問題で金を借りに来て、「ええ、そうそう。」「それがまた、それから光原社にずっと発展したと

いう」ええ、そうそう。そういうことです。それで、中学校にいた時はね、あの時はね、あれは誰も書いてないだろうと思うが、宮沢君がね、わしのところへ来てね。「これくら刷つて来たから」と、かなり刷つてあったと思うが、一枚の紙へね。あの時分にはキングとかいう雑誌があつて、一行ずつなにか難しいことをこう書いたのがあつて、「一行知識みたいな」ええ、そうそう教訓なんか書いて。あんなのをね、紙にこれくらい刷つてきて、「これを夜配ってくれないか」と言つてね。「夜でも朝でもかまわないから、朝早くから人にお前が配っていることが分らないように配ってくれないか」と言つてね。しばらく配つてやったことがある。時々持つて来たので。「その当時、宮沢さんは花巻の農学校におつたでしょうか。それとも、もつやめて百姓していたのですか」はじめには、待つて下さいよ。学校におりましたね。「高等農林に、それから花巻の農学校に」それがわしは、どうもよく分らない。あれは、学校も止めてね、学校には長くおらなかつたでしょう。「学校には、あまり長くおらなかつたようですね」ええ。「それから、羅須地人協会ですか」あれをやつておりました。「いろいろ農業相談所みたいなこと」それもしていたけれどね、その時はお父さんの手伝いをしていた。それで、東京によく行つていたです。お父さんはなかなか商売人だね。わしはお父さんに会つたことはないがね。お母さんには会つたことがありますけれど、なかなか誠実なよい人だつた。お父さんは知らなかつたがなかなか商売人だつたと思う。あの、宮沢がよく株を売りに行つてね。株ですわ。「投資の株式ですか」ええ、株式ですわ。それがなかなか詳しいんだ。わしはそんなことひとつも分らないでしよ。それであいつに習つてね。習つて話したら、細川といつてわしが中学校におつた時、しばらくおつた下宿屋の親父が、そいつがまた玄人なんだね。東京の都電でやりあげたんだ。やりあげた人はめつたにないから。その親父にわしがそんな分らないことを聞いたりするでしょう。「おまえはこつちでそんなことひとつもしていないと思つたが、玄人のような話をするじゃないか、誰がやるのか」と言うから、それは、「ここへもやつて来る宮沢君のお父さんが」と言つと、「ああそうか」。

花巻というところは、ああいうことはずいぶん盛んだそうですがね。むかしは、お米の商売とか何とかいうああいう取引がね。それで行つたです、あれは。「それでお父さんの使いで株の売り買いに行つていたわけですか」ええ。「東京へしよつちゅう出て行つて」しよつちゅう出て行つていた。それからね。浮世絵をね。あれをうんと集めてきてね。どうして集めたかという、親父がどうしたこうしたと言つて、やつぱり、お父さんの関係で買ったものだと思うが。すすけて真つ黒になつてゐるわね。そんなものを何とかお父さんが、あいつを洗つてきれいにして、何とかこう、まあ本当はあんなことしたらいかんのだけれど、水洗といつてね、そんなことをして商売もしていたように思う。わしはたいいていもらつてね、とても売れないようなものを。わしもあれで覚えた。一番初めのやつ原画ですわねえ。もとの人が画いたものですわ。それから次は一番最初に彫つて刷つたもの、それが一番いいです。原画はめつたにない。それから一番最初に刷つたものが一番いいですわね。それから、こんど、刷つたやつをまた元にして刷るですな。そのうち、だんだんだんだん粗くなるんですがね、髪の毛やら。それから、時代がおくれてくると、こんど　とか、藍の色が違つてくるです。そんなことね、あの男にいろいろ習つて、「なかなか、宮沢さんは浮世絵のことなど詳しくかつたらしいですね」詳しい。あれは商売だつた。「商売におやじさんが集めて来る」と言つたように思う。東北にはまだまだ、「花巻農学校やめて…」

五 考察

近森善一の賢治に関する思い出が、どの程度賢治年譜を補訂する内容を含んでいるか、時間をかけ検討を重ねなければならないことである。しかし、一読してその貴重さは了解し得ることのように思う。賢治と近森とが盛岡高等農林学校以来の友人関係にあった事実、それだけでも十分な驚きである。

本節では、すでに私なりに調査、検証を試みた幾つかの事柄があるので、考察にかえて報告しておきたい。第三節「近森善一略年譜」との対照で判断のつく単純な記憶違いについてはふれないこととする。

(一) 近森が盛岡高等農林学校の寮で賢治と同室であったこと

校本全集第一四巻の「盛岡高等農林学校自啓寮同室者名簿」によれば、近森の記憶する第一学年二学期にあたる大正五年二学期の名簿には、室長の賢治の他に、福永文三郎（農学科1部一年）、山中泰輔（農学科2部一年）、末永延寿（同一年）、中嶋信（同二年）の五人の名が記されている。末永延寿と中嶋信に関しては「」が付されており不確定のようだが、一室六名が定員であるから少なくともあと一名の同室者はいたはずで、その一名が近森であったことになる。校本全集での中嶋信に関する「同二年」（「農学科2部二年」を意味する）の記述は「農学科1部二年」の誤りであろう。

(二) 杜陵出版部が賢治の命名であったこと

光原社が賢治の命名であったことは及川四郎の証言によつて知られているが、杜陵出版部に関しては詳らかでない。杜陵出版部自体その実態がよくつかめておらず、東北農業薬剤研究所出版部を改めたものが杜陵出版部（及川の証言）、杜陵出版部を改めたものが光原社（森の聞き書き）ということになっている。童話集『注文の多い料理店』発刊の前後のみ用いられた名称だろうか。光原社との聞き違いもあり得るかと思われ、小松氏に伺ったところ、確かに杜陵出版部と聞いたとのこと。近森は杜陵出版部の名義人だった（及川の証言）ので、近森の記憶違いとも考えにくい。光原社、杜陵出版部ともに賢治の命名であった可能性も高いだろう。ただ、「杜陵」とは盛岡の異名であり、大正一三年当時の「岩手日報」にも杜陵館、杜陵研究会、杜陵少年団などの例が見出せ、当時一般的に用いられた語である。

(三) 童話原稿を東京の文士に見せたが認められなかったこと

童話集発刊以前に賢治が自分の童話原稿を東京の文士に見せた逸話としては、大正一二年一月初旬（新校本全集では四日と特定）、東京滞在中であった弟清六を訪ね、原稿を東京社の婦人画報編集部に持参させたことが「年譜」に記されている。清六氏の会ったのが編集部の小野浩という人物で、「雑誌に向かない」という理由で断られたという。この逸話と近森の記憶する逸話が同じものかどうか、一編集者の「小野浩」では「文士」（小松氏聞書）に相応しくないようにも思える。近森は「小川未明」（長谷部テープ）かとも記憶しているが、その記憶が不確かなものであったにしろ、著名人の誰かであったことを窺わせる。

近森の記憶に近いものとすれば、森荘巳池の聞き書き（前出「イーハトーヴォ」復刊第1号）がある。賢治はトランク一杯につめこんだ原稿を鈴木三重吉の『赤い鳥』社に持ちこん

だとされ、日をおいて三重吉を訪ねたところ、書生から「先生は忙しくて、あの童話は読まれているといっておいでです」と原稿を返されたという。また、小川未明に見せた逸話としては、盛岡高農で賢治と同学年だった大谷良之（農学科1部）の聞き書き「大正十二年頃の賢治さん」（川原仁左衛門編『宮沢賢治とその周辺』昭47）に、「宮沢君は彼の書いた童話を小川未明先生に見ていたといいて、実にすばらしいと賞讃された」とあったとある。しかし、両者とも確かな裏付けのあるものではない。

（四）近森が高知に戻った理由と時期について

近森が童話集の刊行を見ずして高知に帰った理由は、選挙の応援のため郷里の父親に呼び戻されたということだが、近森の証言でその前後の事情がもう少し詳しく分かるようになった。

九州での仕事の帰りに高知に立ち寄ったところたまたま父親の関連する選挙に巻き込まれた、というのが実情のようだ。近森が巻き込まれた選挙とは、年譜にもあるように第一五回衆議院総選挙である。解散が大正一三年一月三十一日、投票日が五月一日であった。護憲三派（立憲政友会、憲政会、革新倶楽部）と政友本党との間で激しい選挙戦が繰り広げられたが、結果は護憲三派の圧勝で加藤高明内閣の誕生となった。浜口雄幸のお膝下での争いもさぞやと思われ、私は当時の地元新聞に選挙違反者検挙の関連記事を期待したが、高知新聞、土陽新聞とも大正一三年頃のものには戦災で焼失しており、果たせなかった。

近森が盛岡を離れた時期だが、証言中にある原稿料の支払いの相手が小熊彦三郎（長崎県立農学校での同僚）とすると、小熊の『果樹園芸教科書』と『蔬菜園芸教科書』の発行が大正一三年二月二〇日なので、三月初旬の頃かとの推定が可能である。その点に関して、九州に行く前に立ち寄った大阪で雷に遭ったとあるので、大正一三年の三月、四月の天気を大阪気象台に問い合せてみたところ、雷は一日も観測されておらず（大阪市内での雷ならば観測漏れはほばないとのこと）、近森が三月に大阪に滞在した裏付けは取れていない。

（五）近森が挿絵画家を知っていた可能性について

近森は童話集の挿絵画家について「たしか学校の先生だった」との記憶を述べているが、もし、近森が盛岡にいたとき挿絵画家を知っていたとするならば、それは誰であったか。菊池武雄が賢治から依頼を受けたのが「夏近いある日」であり、近森は総選挙のあった五月には確実に高知に戻っていたのだから、近森が菊池を見知っていた可能性はない。近森自身挿絵画家に会った記憶を思い出せないこと、菊池の福岡中学着任が大正一三年四月であることを考え併せると、高知に戻ってから得た知識が記憶に紛れ込んでいた可能性が高い。しかし、第一節（三）で考察したように、挿絵画家が「夏近きある日」まで決定していないことも腑に落ちないことではあるので、いちがいに近森の記憶違いとすまされない事情もある。近森が挿絵画家のことを知った頃の出来事として、皇族（竹田の宮か）に会った話が出てくる。そこで、「若手日報」に竹田の宮来盛の記事が載っていないか、大正一三年一月～四月を調べてみたが、その事実を確認できなかった。他の皇族の来盛もなかった。

（六）高知県立農業高等学校に保存されている資料について

高知県立農業高等学校（校長池上一郎）のご厚意により、同校資料館に保存されている県

立高知農業高等学校時代の諸資料を調査する機会を得たので報告しておきたい。

「高知県立農業高等学校要覧（昭和三年三月）」を調べたところ、「現在職員調（昭和三年度）」に近森の名を見つけることができた。

担任学科科目 鉱物、気象、病虫 / 事務分掌 学校 四年農科主任、校友会 講演部、農芸部理事 / 就職年月 昭和二、四 / 職名 教諭

また、同要覧の「教科書調（昭和三年度用）」の第四学年用一欄には、光原社発行の教科書『果樹園芸学教科書』、『蔬菜園芸学教科書』が見られた。『果樹園芸学教科書』は、著者 小態彦三郎、検定年月日（空白）、発行年月日 三年版、定価 一、一五、発行所 光原社。『蔬菜園芸学教科書』は、著者 小熊彦三郎、検定年月日（空白）発行年月日 二年一二月五日、定価 一、一五、発行所 光原社である。近森の就職が昭和二年四月であるから、翌年度から光原社の教科書が採用されたことが分かる。

実物の確認できた光原社発行の教科書としては、『害虫学教科書』がある。印刷 昭和五年一月十日、発行 昭和五年一月十四日、定価九拾五銭、著作者 門前弘多、発行者 及川四郎（盛岡市茅町三三）、印刷所 伊藤勇（東京市赤坂区青山南町三ノ四九）、発行所・発売元 本店 光原社（盛岡市茅町三三、振替東京七三三〇四）、支店 光原社（東京市赤坂区青山南町三ノ四九、振替東京二三二六一）。また、小熊彦三郎の『改定 蔬菜園芸学教科書』も確認できた。発行所は明文堂（東京市神田区錦町一丁目四番地）で光原社ではない。初版印刷が昭和九年一月二日、発行が同一月九日。確認したのは昭和一三年一月二五日発行の再訂一三版である。光原社の事業推移を知るうえで参考になるかもしれない。

近森の名の記されたものとしては、「校友会報」第九号（昭和二年九月一日）があった。「先生を迎ふ」の欄に「本県香美郡御出身の先生を迎ふことは何となく嬉しく感じます。何卒親しみのある御鞭撻を願ひます」とある。資料館には記念誌類もすべて保管されているが、近森が寄稿した文などを見出すことはできなかった。

*

証言中、近森は童話集『注文の多い料理店』の刊行を見とどけ、販売にまで関わったことを語っているが、これなどはどう考えても後に得た知識が記憶に加わったもので、近森の体験としてはあり得ないことである。しかし、人の記憶とは元来がそのようなものであって、ひとり近森の場合のみ当てはまることではないだろう。小松、長谷部両氏のご努力によって残された近森の証言が、賢治研究発展の一助となることを願ってやまない。

一〇年ほど前、賢治の実弟である宮沢清六氏が近森家を訪れたことがあったそうだ。その折、同行した長谷部氏が清六氏に録音テープ（コピー）を差し上げたが、後日清六氏から「土佐弁がむずかしくて何を話しているのかよく分からない」との知らせを受けたそうである。土佐の地に移り住んで日の浅い私にとっても同様で、近森老人の土佐弁にはかなりの苦難を強いられた。本稿では分かりやすさを旨としたため土佐弁を改めたが、今となっては、飘逸とした語り口とともに土佐弁の深い味わいの伝えられないことが惜しまれてならない。